所感

神皮50周年にむけて

鎌田英明

平成27年は年初から世界がテロの荒波に曝された。花のパリがまるで映画かテレビドラマのような銃撃戦の修羅場と化したかと思えば、恐れていたことが現実のこととなり、日本人人質が被害者となる最悪の状況の下での年の始まりとなった。そしてこの稿を書いている最中、今度はアムステルダムでも無残な襲撃事件が起こってしまった。元来無宗教である私には、神の名の下に殺人を犯すという大義名分がどうしても理解できないでいる。迂闊に海外旅行にもいけない世の中になってしまった。それどころか、国内にいても危ないと言われており、これまた能天気に関内あたりを飲み歩いてもいられない。

理解できないと言えば、最近若年者が犯人となる特異な殺人事件も目立っている。その動機が「一度人を殺してみたかった。誰でも良かった」というものだったと報道されるに至っては、信じられないと言うしか言葉が見つからない。明らかに精神異常者であり、昔からそんな殺人者は珍しくはないのだという意見もあるだろうが、せめて街でそういう殺人者に出くわさないようにと我が身の幸運を祈るばかりである。

テレビのミステリードラマでは、まず人が死なないことには話が始まらないし、海外ドラマの検視官ものに至っては、ここまで映像にしていいのだろうかと思うくらいリアルな解剖の映像が次々に出て来る。これを見て自分も医者になろうという発想に向かうならまだしも、レアケースではあろうが、自分でも実際に切り裂いてみたいと思う輩が出てきてしまう世の中になってしまったのだろうか。

巷で流行りのコンピューターゲームも、戦闘ゲームをはじめとして、人を殺すゲームは山ほどあると聞く。それが全てテロリストや異常殺人者の誕生につながるとは言わないが、以前から言われているように、仮想空間で痛みを感ずることもなく、安易に殺戮を繰り返していくことが、脳に何らかの影響を与えない方が不思議だと思えるのだが、電車に乗って周りに座っている乗客たちを眺めても、スマホなり携帯なりを常に手にしていない人間は、私も含めた年寄りなど極少数派だ。

暗い話になってしまったが、10年というスパンでさえ思いも至らなかった変化が、良きにつけ悪しきにつけ起きている。そんな中、伝統を踏襲しつつも新しい時代に即応しながら、神皮は来年50周年を迎える。先達の多くの先生方にバトンが引き継がれながらの50年である。そんな節目に自分が会長として立ち会えることは幸せなことだと思うが、それなりのプレッシャーも改めて感じている。この50年間の社会の移り変わりの中で、神奈川県皮膚科医会が如何に発展し、そして後世にむけてどのように発展していくのだろうか、会員の皆さんと共に改めて考える機会になれば良いと願っている。